

## 高句麗王陵コンプレックス

西谷, 正

<https://doi.org/10.15017/1904656>

---

出版情報 : 史淵. 134, pp.109-136, 1997-03-10. 九州大学文学部  
バージョン :  
権利関係 :

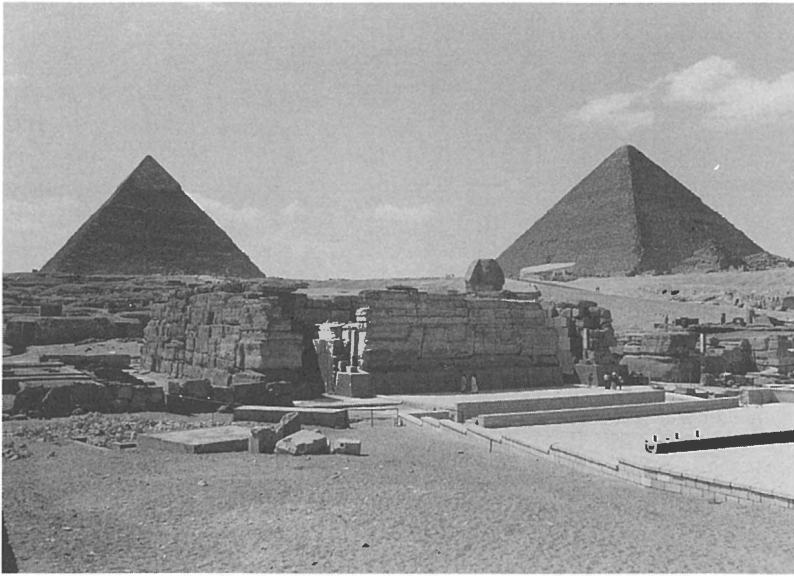
# 高句麗王陵コンプレックス

西 谷 正

## 一 はじめに

日本列島古代の大王陵の中で、最大規模を誇るものは、いうまでもなく伝・仁徳天皇陵すなわち大山古墳である。そして、しばしば中国の秦・始皇帝陵やエジプトのクフ王・ピラミッドと比較される。その場合は、墳丘規模の比較を規準にしている。確かに大山古墳は、二重の周濠や数基の陪塚群を含めて考えると、さらに壮大さを増すことになる。それに対して、始皇帝陵やクフ王のピラミッドは、墳丘の周囲に数多くの付属施設群を配置しており、それらをトータルにとらえると、その壮大さは大山古墳の比ではないことに気づく。

そこで、たとえばギザのピラミッドを見ると、まず、王のミイラを安置する玄室を地下深く包蔵した、角錐形をなす墳丘本体 (Pyramid) がある (第一図)。そして、そのそばには、葬送・祭祀につかわれる葬祭殿 (Cult Temple) や、儀式用の船の濠 (Boat Pits) などがある。それらの周囲には、周壁 (Enclosure Wall) がめぐる。葬祭殿からは、ナイル川の河岸へまっすぐに参道 (Causeway) が通じる。参道の東端でナイル川の河岸には、王の遺体を浄める儀式



第1図 ギザのピラミッド

1982. 4. 4

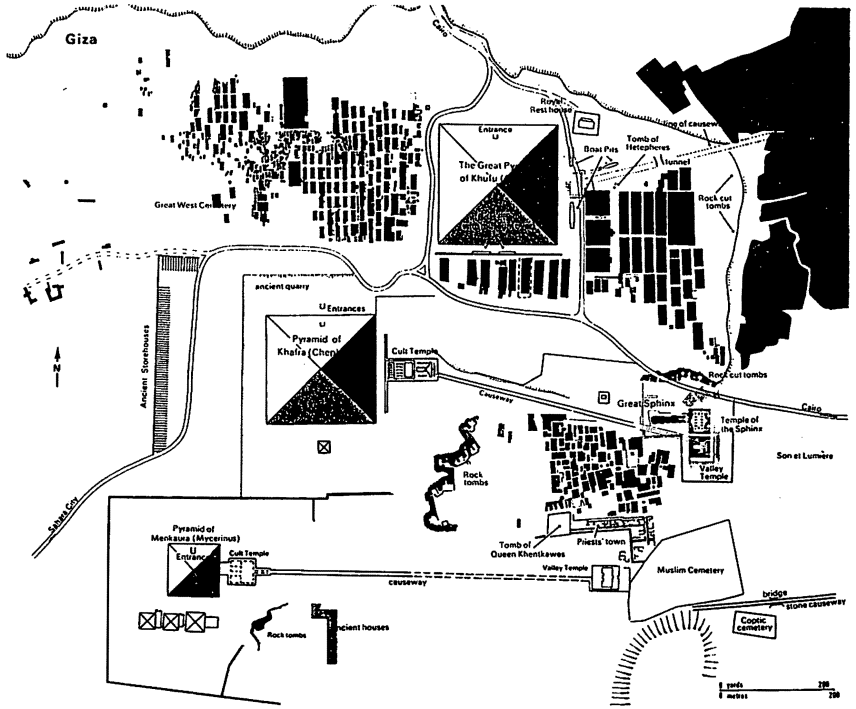
を行った後にミイラを作る場所としての流域殿 (Valley Temple) がある。さらにピラミッドの外側には、中・小多数の陪塚群 (Satellite Burial Mounds) が付属する。つまり、ピラミッドの場合、ピラミッド本体だけでなく、多くの要素から構成されていて、それらを総称して、ピラミッド複合 (Pyramid Complex) と呼ばれている (第二〇図)。

このように見えてくると、大山古墳をはじめとする日本の大王陵において、陪塚群のほかに、たとえば、大王陵の祭祀建物や管理棟といった付属施設群の想定も類推されるが、現在のところ、そのような遺構群は確認されていない。

ところが、朝鮮半島では、すでに早く三国時代高句麗の中期の王陵において、ピラミッドで見たようなコンプレックスが存在した可能性を見出すのである。

## 二 高句麗・太王陵の陵園

朝鮮半島古代の高句麗が国家形成を行っていった、王や貴族などの支配階層は、競って壮大な古墳を築造した。

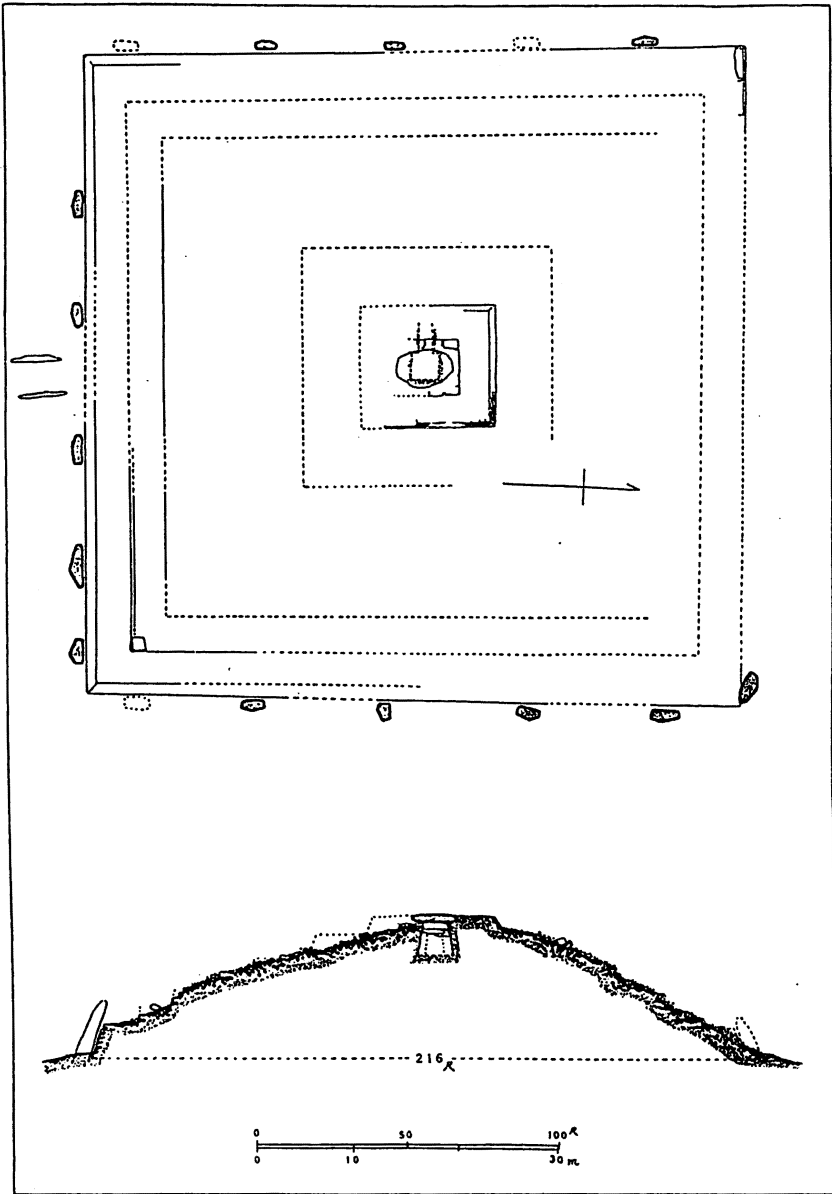


第2図 ギザのピラミッド・コンプレックス  
(Atlas of Ancient Archaeology より)

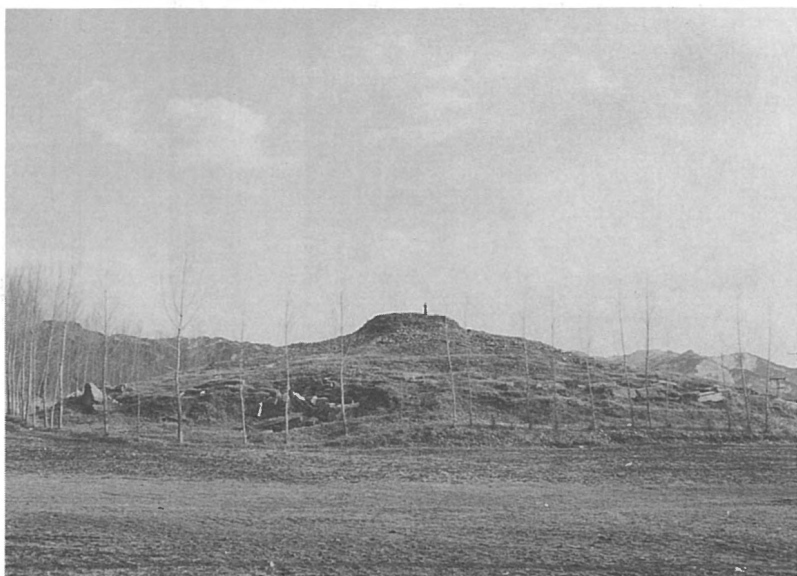
たとえば、高句麗中期の王都であった国内城の故地、現在の中華人民共和国吉林省集安県を見ると、そこには一万余千基を越える古墳群が確認されている<sup>(4)</sup>。そのうち、最大規模を誇るのが太王陵である。

太王陵に対する調査は、すでに早くから鳥居龍藏・関野貞・梅原末治・池内宏らの先学によって行われてきた。ここではまず、池内宏の総括的な調査記録にもとづいて概観する<sup>(5)</sup>。

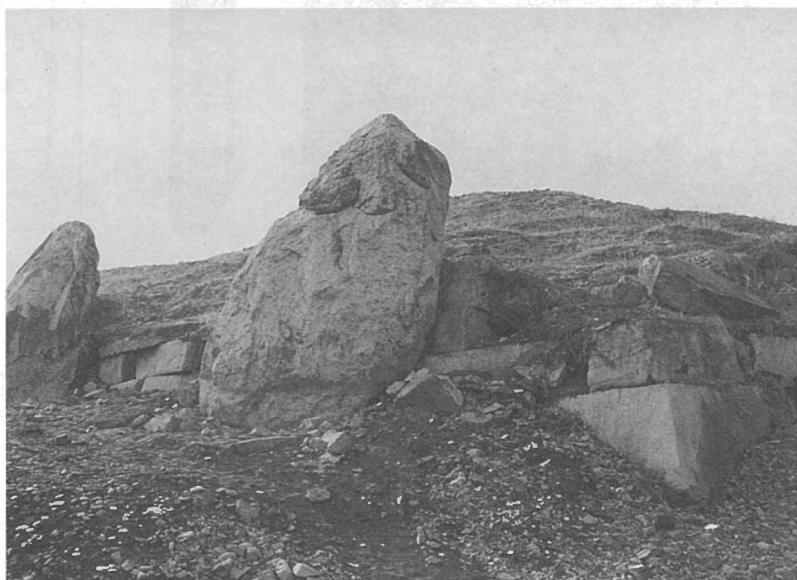
太王陵は、有名な広開土王(好太王)陵碑の西南約三百数十メートルところに位置し、小高い丘陵の南端付近に立地する。太王陵(第三図)は、平面方形をなすが、その基底部の各辺はほぼ東西南北の方位線と一致する。基底部の一辺の長さ約六三メートル、現存高約一五・五メートルを測り、七段築成



第3図 太王陵外形実測図(『通溝』巻上より)



第4図(上) 太王陵全景

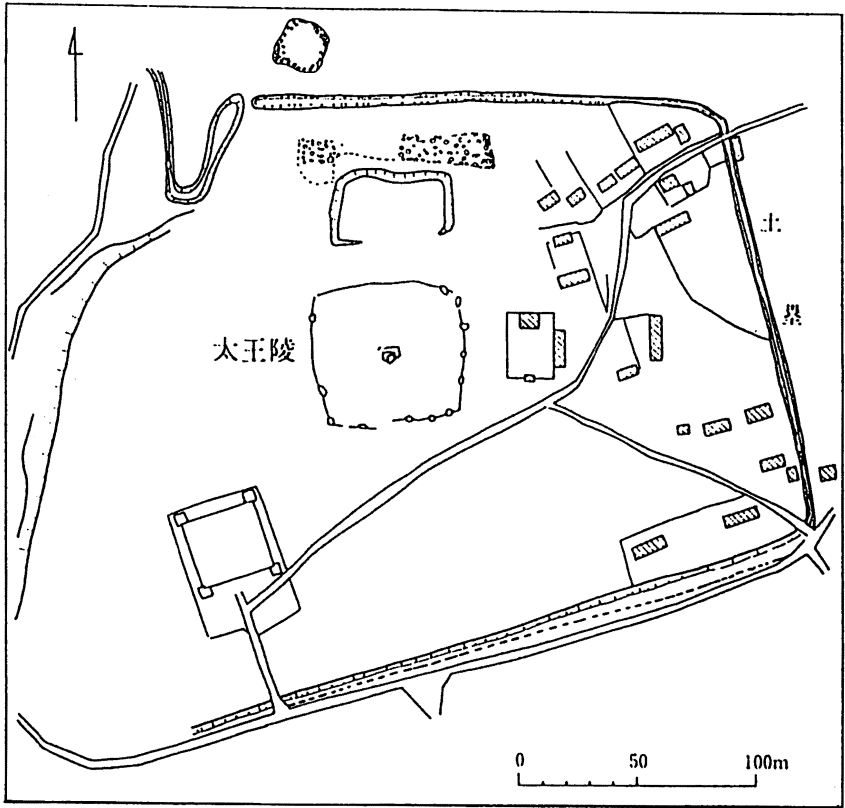


第4図(下) 太王陵裾部



第5図 太王陵銘埴  
(関西大学「考古学資料図鑑」および「考古学雑誌」5-3より)

のピラミッド形をなす積石塚である（第四図上）。基底部の周辺には、最も大きなもので高さ六メートル余りの大きな自然石を寄せかけている（第四図下）。現在、南辺に五個、東辺に四個、北辺に一個、西辺に四個残存するが、もとは各辺に五個ずつあったと推定されている。墳頂部には、五段目の段築上面に基底部を置き、一辺約一二メートルの最上面すなわち七段目の段築の上面に天井石の上面がくる横穴式石室が、西側に開口して設置された。石室は両袖形式



第6図 太王陵園（『東洋史論叢』より）

で、平面方形の玄室の中央に羨道がつき、全長は四メートルを越える。

ところで、この古墳が太王陵と呼ばれるのは、積石の中から多数の瓦罫が発見され、そのうちの埴に「願太王陵安如山固如岳」の一〇文字が隷書体で陽刻されていたことによる（第五図）。

さて、ここで問題にしたいのは、古墳の周囲にめぐらされた土塁であり、いわば陵園をなしている点である。この問題について、いち早く取り上げたのは、藤田亮策である。藤田によると、<sup>⑥</sup>太王陵の周囲には、広範囲に渡って、敷石があったと推測されている（第六図）。古墳本



体の北辺から約九〇メートルを隔てた位置に、高さ一メートル、幅三・五メートルの土石混築の土塁が東西方向に長さ約二五〇メートルにわたって走っていた。その東端は大きくカーブを描いて東寄り南方へと続くが、長さ約二二〇メートルの地点で、さらに西方に折れ曲がり、古墳の南側を通って約三五〇メートルの長さまで延びていた。西辺の土塁は、大部分が消滅してしまっていたが、わずかに耕作地のところどころが隆起して、その痕跡をとどめた。ただし、西北の隅角部は、約五〇メートル余りの長さで、北辺の土塁に連絡して南西方向に折れ曲がっていたことから、およそ西辺の長さが約三五〇メートルと推定された。なお、土塁の東辺は、幅五メートル、高さ約一・五メートルで、赤色粘土をもつて築いたが、台地の縁辺に沿って築かれたため、地形に左右されて東寄りに少し方向が開いたと考えられた。また、南辺の土塁は、一九三八(昭和一三)年当時、ほとんど痕跡をとどめる程度であったが、畑地と異なる赤色粘土によつてじゅうぶんに知ることができたそうである。しかも、東南隅から西々南方向に斜めに走っているのは、鴨緑江の流路に平行した台地の縁辺に築いたためで、土塁の外側の南面は二メートル余りの傾斜面となっていたといわれる。

実は、この土塁の存在に最初に注目したのは鳥居龍藏といわれ、一九二一年(大正元)年二月の現地調査の折、とくに北側の土塁の写真撮影を行っている。藤田亮策は、一九三五(昭和一〇)年秋に、池内宏・浜田耕作の調査に同行した際、とくに注意して北側の土塁を歩測したが、その後、一九三八年四月によくやく実測を果した。藤田によると、その当時、土塁の内部には、古墳の東側に隣接して、福寿宮と呼ばれた廟があり、また、西南側の近くには、元の村役場の建物があった。さらに、古墳の東北と東南の方向には朝鮮族の民家が十数棟建て込んでいた。古墳の前方つまり南面には、新たに満浦間の鉄道線路が横切ったため、土塁は鉄道の敷地内に入っていた。

いっぽう、古墳の背後すなわち北側の土塁の内側二〇メートルのところには、一九三八年当時、東西九八メートル、南北二五・一八メートルの横長の石塊群があった。一九三五年当時は、ほぼ長方形で高さ一メートルを認めたが、一

九三八年当時には、まったく砂利置場の観を呈し、その南側に続く大きな土坑とともに、そこが付近の住民によって建築用資材として採取され、その残骸が残っていたといわれる。しかし、詳細を見ると、石塊の一部にはその当ても大形の切石が認められ、もともと同形同大の積石塚が五、六基並列して陪塚群を形成していたと推定された。

つぎに注目されるのが、古墳の南方一八〇メートルの地点で、民家の裏に建築跡があったことである。そこからは、礎石と菱形文のある埴、高句麗の軒丸瓦などが発見された。ここの礎石については、鳥居龍蔵が『南滿洲調査報告』に、八角の作り出しのある花崗岩製であることを記録している。ところで、横穴式石室は西側に開口している。古墳の南面中央前面には三メートルの間隔を置いて平行する長石があつて、拜道の痕跡と思われることと、古墳の北側に陪塚群のあることなどから、藤田は、古墳そのものは、地形にしたがつて、鴨緑江の方向すなわち南側に正面を置いていたと考えた。

そのように考えると、古墳の南北の長軸線は東に八度振れていることになるが、その場合、上述の建築跡は古墳の南正面にあつて、古墳の祭祀もしくは管理に関連する遺構と想像された。さらにまた、古墳の背後の丘陵上には、一辺の長さ二〇～二五メートルの五基の積石塚と、小形の二基の積石塚があつた。そのうちの二基は土塁の西北外に接し、他の積石塚は、古墳の背後の北側に連接して、広開土王陵碑の西二〇〇メートルの地点に至っていた。この広開土王陵碑は、古墳の東北四五〇メートルの平坦部に立つ。いま述べた積石塚をも古墳の陪塚の一部と見ることができれば、まさに陵碑は古墳の陵域内にあつたとも解釈されるという、重要な指摘を行っている。

ちなみに、太王陵古墳の被葬者に関して、藤田亮策は、景勝地に立地していること、高句麗古墳で唯一の大形土塁がめぐっていること、そして、古墳の規模が雄大であることなどの諸特徴から高句麗の王陵であると見た。筆者は、さらに加えて、太王陵銘埴の出土や陵碑の至近さなどの点で、この古墳が好太王すなわち広開土王の王陵であると考える。

前述の藤田亮策の觀察記録をもとに考察を進めると、太王陵古墳は、一種の陵園を形成し、その構成要素となるいくつかの施設群を擁していたことが想定される。まず、陵園の中心となる古墳本体は、おそらく数万基と思われる高句麗古墳の中で最大規模を誇っている。つぎに、古墳前面における建築跡の存在であり、祭祀もしくは管理のための建物が建っていたことが考えられたところである。この点については、広開土王陵碑の碑文の中に、たとえば、王陵を守護し、清掃する守墓人の戸数三三〇戸の構成に関する記録があることを考えると、当然のこととして、守墓人の住居や、彼らの管理者の住居や官衙が想定される。さらに、古墳本体や建物を取り囲んで土塁がめぐり、その内・外には多数の陪塚群を擁している。そして、至近の距離に陵碑が立っていた。このように見てくると、太王陵古墳は広開土王の王陵として、各種の構築物からなるコンプレックスを形成していたといえるのではなからうか。

### 三 高句麗・將軍塚の場合

太王陵の北東二・〇五キロの位置にあつて、太王陵と並らぶ大形の積石塚として知られるのが、將軍塚である(第七図)。この古墳に対する調査も、関野貞らによつて早く着手されたが、一九三六(昭和一一)年の池内宏・梅原末治・水野清一・三上次男らによる調査結果を、池内宏の概括的な記録からまず見てみよう。

古墳は、集安の通溝平野の東北方に位置し、土口子山の山麓に沿つた高地にある。墳頂に立つと、通溝平野を一望のもとに見わたすことができる景勝の地に立地する。將軍塚は、丁寧に加工された花崗岩で方形七段に築き上げたピラミッド形の壮大なものである(第八図)。墳頂部は現在、覆盆のように隆起した形をなし、土砂と漆喰に覆われている。墳頂部の周縁には葛石が遺存したところがあるが、そこには長さ三〇センチ余りの間隔をおいて、直径一〇センチほどの柄穴を穿つたものが認められる。さらに、中央部は河原石と漆喰で固めて周縁部の葛石の高さより一段高くなつた方形の高まりがある。このことから、もともとここには、通溝の遺跡で多く見られる方形の小土墳のような



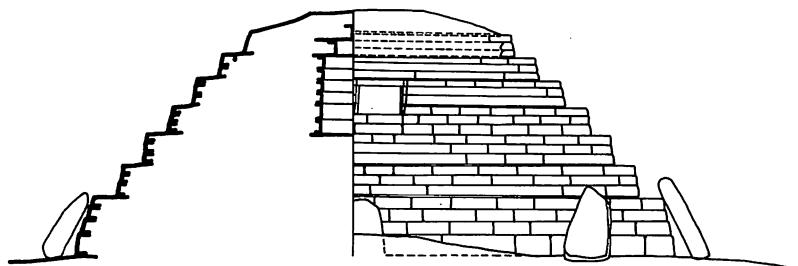
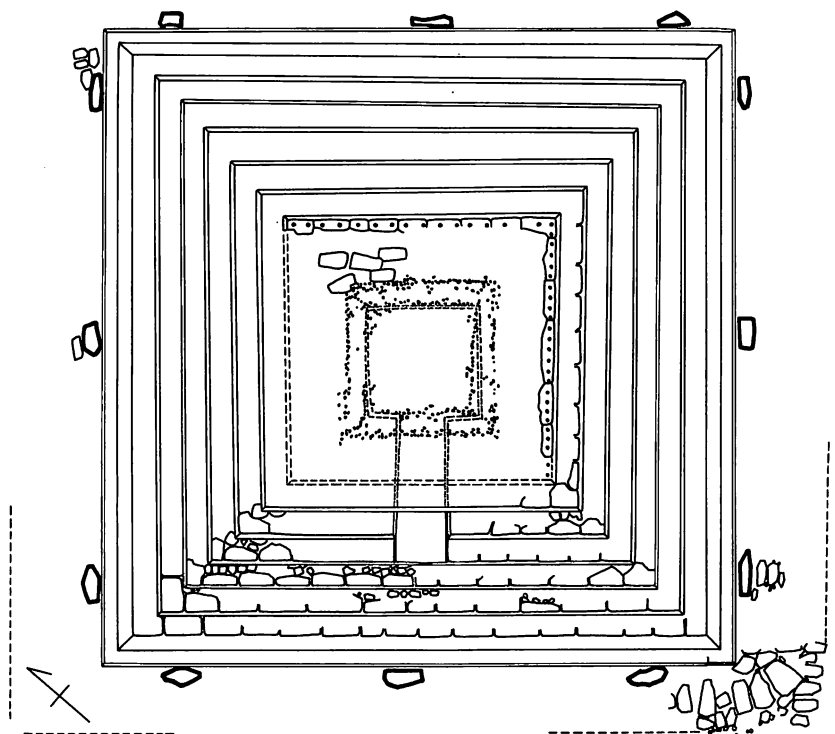
第7図 將軍塚全景(西南から)

1991. 5. 23

形状を呈していたのではないかと推測された。また、墳頂部に瓦片が散乱しており、瓦葺の屋蓋が建っていたとも考えられた<sup>(9)</sup>。

古墳は、西南に面して築かれているので、四隅を結んだ対角線はN.50°Wで、ほぼ東西南北の方位線状になることになる。基底部の一辺の長さは約三二・二―三三・七メートル、高さは約一二・五メートルを測る。なお、墳丘裾部の各辺には、太王陵の場合と同じように、大形の自然石を三つずつ寄せかけて立てている。つぎに、埋葬施設を見ると、墳丘第三段目の上面に基底部を置く花崗岩切石積みの横穴式石室が築かれ、西南向きに開口している(第九図)。玄室は、長さ・幅と高さがともにほぼ同じ約五・六メートルを測り、その西南側中央に、幅約二・九メートル、長さ約八・九メートルの羨道が取りつく。そして、玄室内部には、長軸と平行して棺台が二個所設けられた。

ここで、將軍塚古墳の周囲を見ると、池内宏が指摘したように、注目すべき若干の遺構が存在した。まず、古墳の周囲には幅約三〇メートル前後にわたって方形の範



0 10M

第8図 將軍塚外形実測図 (『通溝』巻上より)

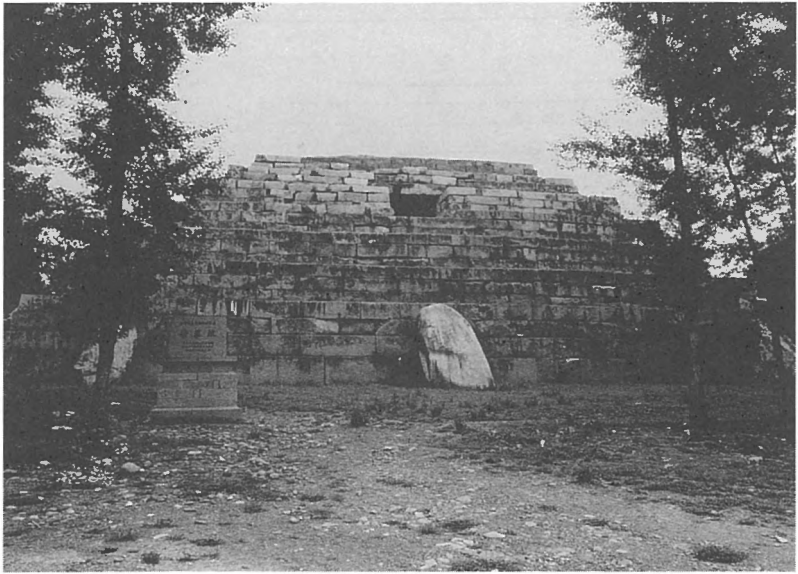
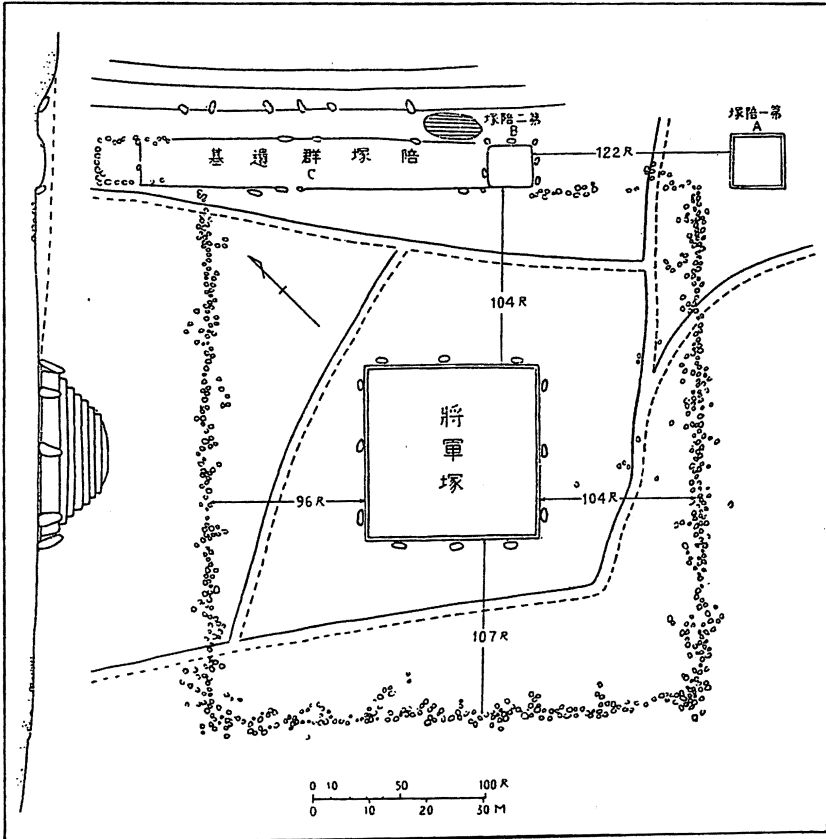


図9図 將軍塚石室開口部（南から）

1985. 8. 23

囲内に河原石が敷き詰められていたらしい（第一〇図）。西北側では、幅約二九メートルの敷石限界線に石灰岩の切石を一列に立てていた。また、北東側に当たる背後では、その敷石の幅約三メートル限界線に沿って、おそらく八基からなる陪塚群が並んでいたことがわかった。そして、東南方に少し離れて独立的に位置する第一陪塚は、將軍塚の東西方向の対角線の東四四メートルの延長線上に当たり、遺存状況も比較的良好である（第一一図）。また、陪塚群の背後約七メートル付近は、丘陵端を削って傾斜面をつくり、そこに大石を寄せかけた形跡があったともいわれる。

いっぽう、將軍塚の前面左側の丘の上には建築跡があったといわれる<sup>(10)</sup>。このように見えてくると、將軍塚は一定の墓域と、その内部に陪塚群を配した、一種のコンプレックスを形成していたといえなくもないのである。ちなみに、將軍塚のほぼ正中線上の左脇にあり、西南方一六五〇メートル離れて立つ広開土王陵碑と、その間に漢墓の神道のようなものを想定して、広開土王陵に比定する見解が古くからある。その当否はともかくとしても、



第10図 將軍塚陵园（『通溝』卷上より）

高句麗の王陵であることはまちがいないだろう。

#### 四 秦漢皇帝陵における王陵コンプレックス

高句麗の太王陵に王陵コンプレックスの概念を導入し、さらには將軍塚にも、その変容形態を見ようとしたが、そのような概念がどうして生まれたかを考えるとき、中国大陆の秦漢皇帝陵が視野に入ってくる。

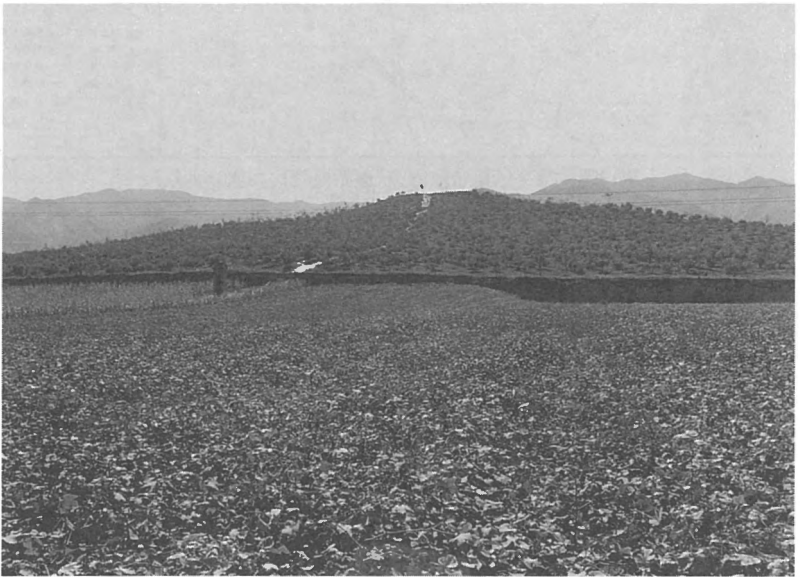
#### (一) 秦漢皇帝陵

秦の始皇帝陵が、中国の歴代皇帝陵の中でも最大規模を誇る陵园を形成していることは、その遺跡が、陝西省西安



第11図 將軍塚墳頂部から見た陪塚

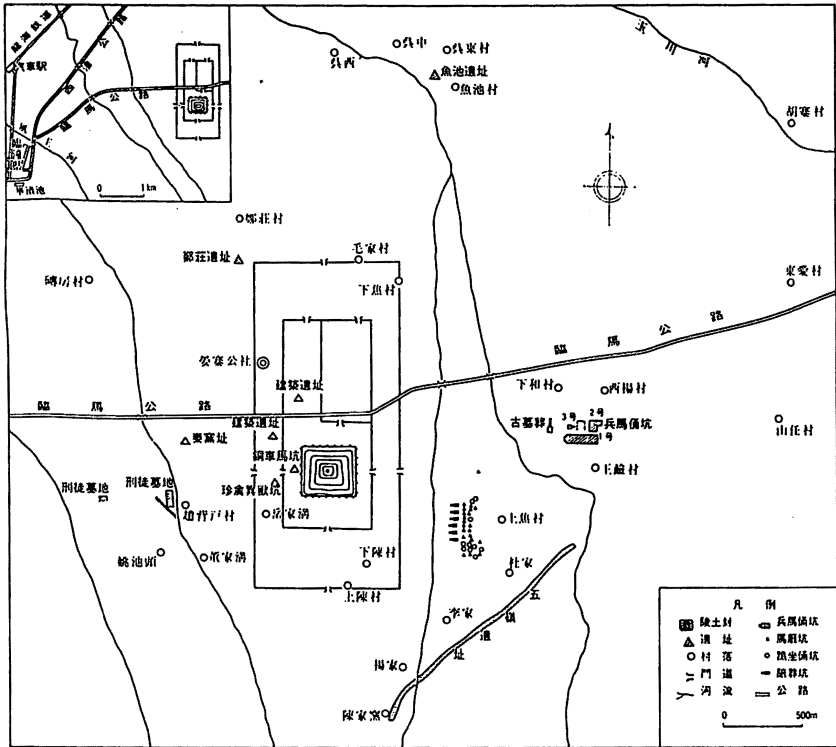
1985. 8.23



第12図 秦・始皇帝陵

1980. 10.10





第13図 秦・始皇帝陵園 (『秦始皇陵兵馬俑』より)

市の東方約三〇キロに位置する、臨潼県の驪山の北麓にあることから、あまりにもよく知られている。

陵園は、面積が実に五六・二五平方キロといわれるので、桁外れに規模が大きいことがわかる。つまり、墳丘だけを見ても、東西約二七七・七メートル、南北約三五〇メートルの長方形の平面をなし、高さが約四三メートルという截頭四角錐形をした大規模なものである(第一二図)。墳丘周囲の地上に建てられた大小多数の建造物群とともに、墳丘の地下深くには、さながら地下宮殿を再現するかのような豪壮で華麗な墓塚が営まれたといわれる。そして、墳丘の周囲には、南北に長く長方形平面で、内外二重の塀がめぐらされた。ちなみに、塀の外周は九二九四メー

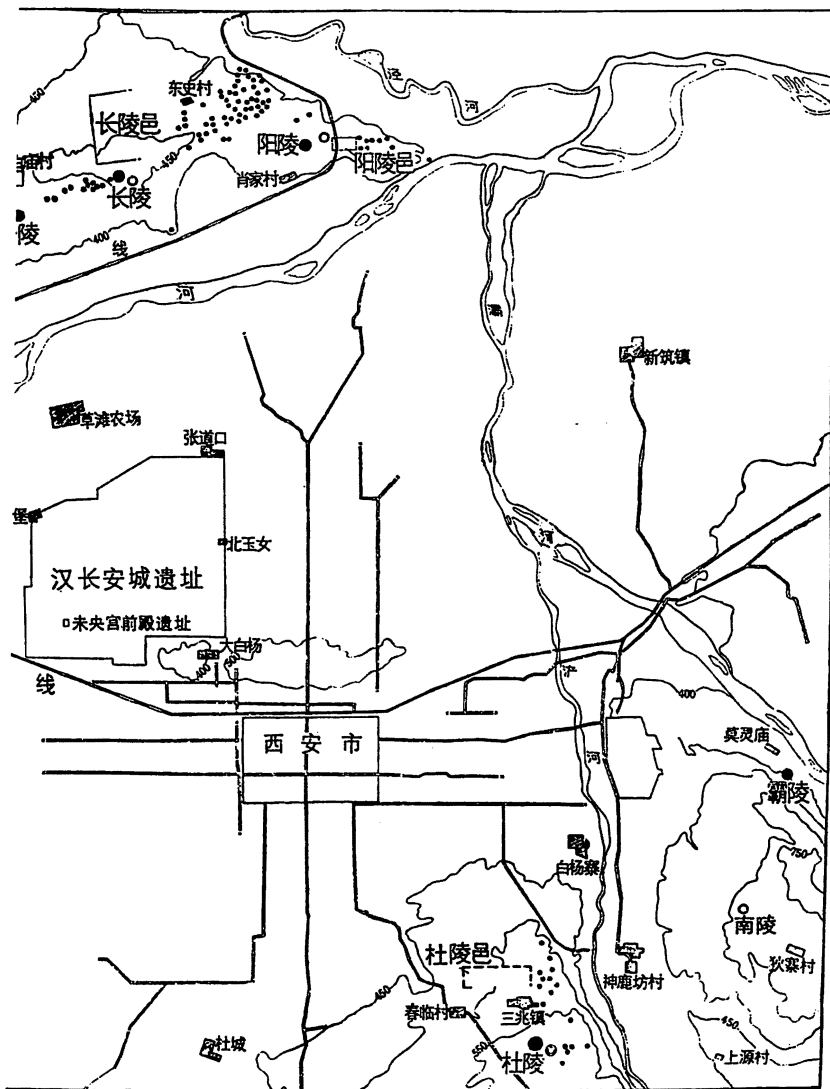
トルの規模を有する。さらに、塀の内外には、多数の付属施設群が濃密に配置されている(第一三〇)。

始皇帝は、紀元前二四七年に一三才で即位して間もなく、寿陵の造営工事に着手した。その後、二二〇年の死去の前年には、農民の反乱が起こって工事が停止されるなどの三〇年余りの間、全国各地から工事のために徴用された徒刑者は七〇万人余りといわれる。そのようにして広大な陵園が造営されたわけである。

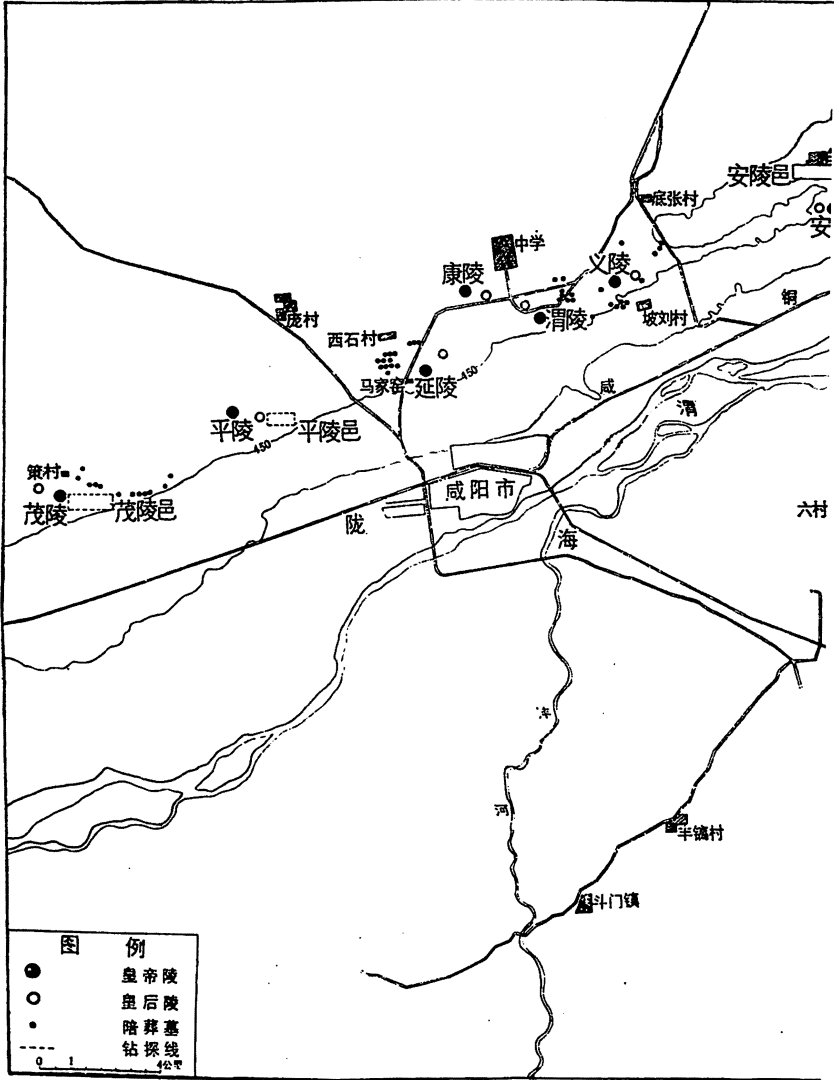
ところで、塀の内外の諸施設のうち、とくに私たちを驚かせたのは、銅車馬坑と兵馬俑坑である。銅車馬坑は、墳丘の西方に当たり、墳丘裾から二〇メートルほどのところで、実物の二分の一の大きさとはいえず、精巧を極めた金銅製の馬車が二輛見つかった。二輛の馬車は八頭立てで、御者が二人乗っている。始皇帝の靈魂が、寝つまり陵園に設けられた、死後に生活し遊覧する場所を巡行するための、いわば専用の馬車といわれる。

兵馬俑坑は、<sup>(12)</sup>いままでもなく、始皇帝の軍団を地下に再現したものであるが、墳丘から東へ約一・五キロの位置にあり、三個所の俑坑と一個所の未完成俑坑が明らかにされた。そのうち一号坑は、東西約二二〇メートル、南北約六〇メートル、深さ約四・五〜六・五メートルの巨大なもので、武人俑七千体以上、馬俑一〇〇頭余り、戦車一〇〇台余りなどが出土し、始皇帝の近衛師団もしくは宮城宿衛軍の往時の姿を彷彿とさせる。二号坑は、平面がL字状をなすが、東西約九六メートル、南北約八四メートル、深さ五メートル、の規模を示す。ここでは、弩兵・戦車・騎兵からなるが、それらは前方の弩兵による方陣、右後方の戦車隊、中央の弩兵・戦車・騎兵の混成部隊、そして、左後方の戦車と騎兵の混成部隊という四陣編成になっている。さらに、三号坑は、凹字形平面をなすが、東西約二八・八メートル、南北約二四・六メートル、深さ五・四メートルともっとも小規模である。ここには、戦車一台と衛兵俑六四体が埋まつていた。なお、二号坑と三号坑の間で四号坑が見つかったが、未完成に終わったもので、陶俑なども検出されなかった。

さらに、最近になって、銅車馬坑や兵馬俑坑につぐ重要な発見として、墳丘の北方約一三〇メートルの地点で、建



(『漢杜陵園遺址』より)



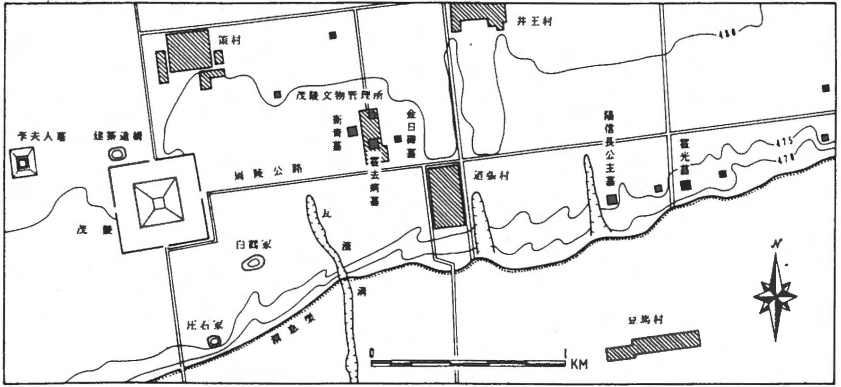
第14图 前漢皇帝陵分布图

築遺構群が見つかり、陵園に建つていた華麗な地上建造物の実像が浮び上がりつつあるのである。そのほか、陵園内でこれまでに知られているものに、陪葬坑<sup>(15)</sup>・刑徒墓<sup>(16)</sup>、馬廐坑<sup>(17)</sup>、珍禽異獸坑等々がある。

## (二) 前漢・皇帝陵の諸例

前漢時代には、一一代の皇帝が在位したが、いずれも壮大な皇帝陵を造営した。そのうち、文帝の霸陵と宣帝の杜陵がそれぞれ西安の東郊と南郊にあるのを除くと、他の九代の皇帝陵はすべて西安北郊の咸陽台地に東西三六キロにわたって築かれた(第一四図)。その中から、咸陽台地の東端に位置する四代景帝の陽陵と、同じく西端に位置する五代武帝の茂陵、ならびに、西安南郊の七代宣帝の杜陵を取り上げることにする。

まず、陽陵<sup>(18)</sup>は、漢の後元三年(紀元前一四一)に亡くなった景帝の陵として、すでに紀元前一五三年に、当時の陽県に寿陵の築造が開始されている。陽陵の東北約四五〇メートルの地には、王皇后陵のほか、三〇基余りの陪葬墓が配されている。陽陵は、一辺の長さ約一七〇メートルに、高さ約三二メートルの規模をもつ截頭方錐形の墳丘をなす。周囲には、平面方形の周壁がめぐるが、その規模は、一辺の長さ約四一〇メートルを測り、各周壁の中央に一つずつ、合計四つの門を設けている。王皇后陵は、一辺の長さ約一六〇メートルに、高さ約二五・二メートルのやはり截頭方錐形をなし、そして、一辺の長さ約三二〇メートルの周壁をめぐらし、陽陵と同じように四門を開いている。陽陵ならびに王皇后陵には、付属する陵園建築や陪葬施設が造営された。まず、陽陵の東南約四二〇メートルで、東北に位置する王皇后陵とは約七四〇メートル離れて寢殿が建つていたらしい。東西約一二〇メートル、南北約八〇メートルの遺跡地には版築の基壇が遺存する。寢殿の東南には、台地に沿って建築遺構があり、瓦埴などが出土する。その範囲は、東方へと続き、王皇后陵の東側に至る。便殿もしくは陵園管理棟の可能性がある。陽陵の周囲には、北と東に多数の陪葬墓が分布する。陽陵の築造工事に際し、一万人以上の刑徒が動員されたといわれるが、その墓地が陽陵の



第15図 茂陵陵城平面図 (『前漢皇帝陵の研究』より)



第16図 霍去病墓から見た茂陵遠景

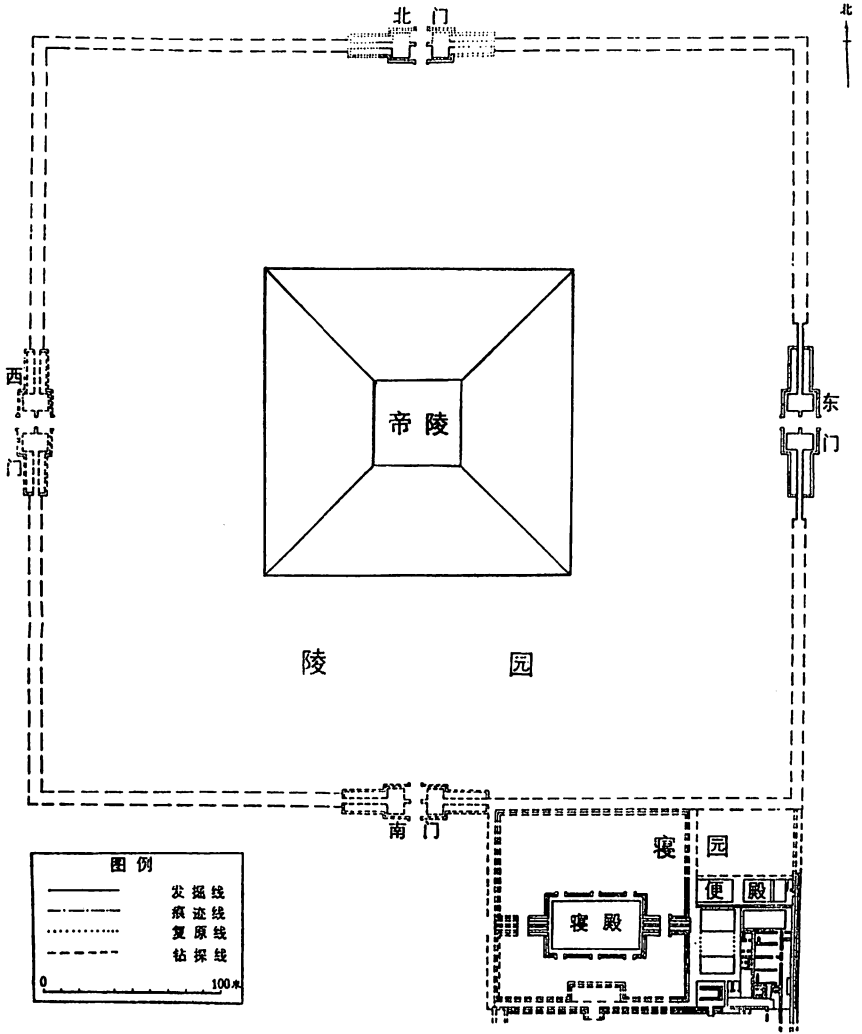
1980.10.10

西北一・五キロほどのところで確認されている。さらに、陽陵の周囲では、陪葬坑が何個所かで知られる。そのうち、陵園の東南に位置する大型の陪葬坑に対し、道路の建設工事に関連して、一九九〇年五月から本格的な発掘調査が実施された<sup>19)</sup>。その結果、東西約三二〇メートル、南北約三〇〇メートルの範囲内で、俑坑が東西に一四列、南北方向に整然と配置された合計二四基が確認された。その際、各種の出土品四千点余りを見たが、とくに六〇〇点余りの彩絵陶俑は芸術性に富む点でも注目される。

つぎに、咸陽台地の西端に位置する茂陵を見ることにする。武帝は、紀元前一四一年に景帝の後を継承して即位すると、間もなく寿陵の造営に取りかかり、五四年間の治世のうち、実に五二年間を要したといわれる。地名にちなんで茂陵と名づけられたこの陵は、前漢の皇帝陵の中でも最大規模を誇る。すなわち、一辺の長さ約三三〇メートル、高さ約四六・五メートルの截頭方錐形を呈する。その周囲には、一辺約四三〇メートルの平面方形の周壁をめぐらす。周壁の各辺にはそれぞれ一つづつの門が設けられた。ちなみに、周壁は、幅約五・八メートルの土築である。茂陵の周辺には、西北五〇〇メートルほどのところに李夫人の英陵や、東北約一キロのところには衛青と霍去病の墓など、陪葬された陵墓群が数多く知られる(第一五・一六図)。

ところで、文献史料によると、寝殿や廟など多くの建物群があつて陵園を形成していたことがうかがえる。そして、『太平御覧』が引用する『閔中記』には、「陵を守衛し掃除するもの五千戸、陵令一人、館令一人、寢廟令一人、園長一人、園門令史三二人、侯四人」とあつて、令や長をはじめとする多くの官吏がいて、陵園を管理していたことも知られる。つまり、いわば管理棟ともいへべき建物群の存在も推測されるわけである。事実、これまでの地表調査などによつて、武帝の靈魂が遊樂するための白鶴館の遺跡が残り、また、瓦埴・水道管・建築部材などの出土から、管理者の居住地区でもある陵邑の場所も推定されるに至っている<sup>20)</sup>。

最後に、漢の長安城の東南約一六・五キロのところにある七代宣帝の杜陵に触れておこう。宣帝は、武帝の曾孫に



第17図 杜陵園と寝園関係図 (『漢杜陵園遺址』より)



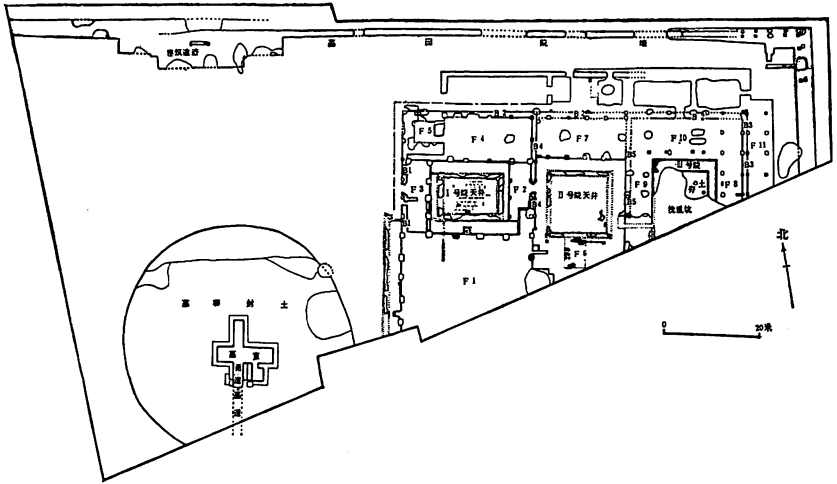
当たり、昭帝の後を継いで紀元前七四年から同四九年まで在位した。『漢書』宣帝紀によると、即位後そう遠くない元康元年（紀元前六五）、杜東原の地に寿陵の地を選び、杜陵と名づけている。

杜陵は、一辺の長さ約一七五メートルに、高さ約二九メートルの截頭方錐形をなし、その周囲には、一辺約四三〇メートルの方形平面に周壁がめぐり、陵園を形成する。陵園の各辺には一つずつの門が設けられている（第一七図）。そのうち、北門と東門が発掘され、また、西門と南門でも試掘やボーリング調査が行われている。杜陵でもっとも注目されるのは、陵園の東南に接つて設けられた寢園である。ここには、南門に近く寢殿と、その東に隣接して便殿の宮殿建造物が建てられていたことが、発掘調査によつて明らかにされた<sup>23</sup>。また、杜陵の東南に五七五メートルばかり離れたところには、やはり寢園を付設した王皇后陵があるほか、封土が現存する六二基をさらに越える多数の陪葬墓が、杜陵の北およそ三キロ余りのところから、王皇后陵の東南約一キロのところまで、広範囲に散在している。さらに、杜陵の西北二・五キロの地点を中心に東西に約二・一キロ、南北に約五五〇メートルの長方形の範囲に陵邑の存在が想定される。ここは、文献史料で三万戸、実際には三〇万人以上の人口を擁していたといわれる。このように見てくると、杜陵の陵域は、何と東西四キロ、南北四キロに及んでいたことになる。

### （三） 後漢・漢魏洛陽城西・墓園遺跡について

これまで見てきた秦・漢時代の皇帝陵に対して、後漢時代の地方豪族の墓園遺跡は、数少ない発掘調査例として重要である（第一八図）<sup>25</sup>。

一九八七―八八年に、河南省洛陽市の東郊で発掘調査された墓園遺跡は、漢魏洛陽城の西側城壁から西に二・五キロほどのところに位置する。この遺跡は、周壁で囲まれた東西約一九〇メートル、南北約一三五メートルの長方形をなす。そのうち、東西一六八メートルと南北が東端で三〇・六メートル、西端で九八・五メートルの範囲が発掘調査さ



第18図 後漢墓園遺跡 (『考古学報』1993-3より)

れた。そこではまず、周壁の東北隅と北壁西寄りの二個所で礎石建ちの建築遺構が見つかった。前者については、墓園の防御施設と考えられるが、後者の北壁の遺構は、その南側に墓園主人公の墳墓が位置するので、北門の可能性がある。墳丘はほとんど消滅していたが、高さ一メートルほど遺存した夯築の状況から直径四八メートルの円墳と推定された。地下に埋設された墓室は多室の博築墳であるが、南北の長さ一二メートル、東西幅一一・七メートルを測る。墓室の構造と、内部から出土した各種の土器や五銖銭などから考えて、洛陽焼溝漢墓編年の第六期、つまり後漢中・後期で、桓帝から献帝に至る時期に相当するが、もう少し限定して西暦一四七―一六〇年ごろの年代が与えられている。

ところで、墳墓の東側では、建築遺構群が検出された。これらは、東西に並らぶ三院形式をとり、それぞれの院内に殿堂廊舎の建造物が建っていた。最も西に位置し、墳墓に面している院には、最大の建物があり、ここが最も主要な場所であったことを思わせる。この建築遺構は、前述の杜陵園の東南にあった五号遺構との類似点が多く見られることから、便殿と類推される。つまり、宣帝が生前に使用した器物や衣

服を保存し、また、祭祀なども行ったところである。ただし、この墓園は、当時の皇帝陵や地方豪族の陵墓と比較検討された結果として、二千石の官秩で、太守以上の官職をもつ地方豪族の墳墓と考えられている。

## 五 おわりに

これまで述べてきたところをまとめると、まず第一に、世界の王陵を比較するとき、王陵本体いかえれば墳丘そのものの相互の比較のみにとどまっていたは、正しい歴史の評価が下せないという点である。この点に関して、エジプトのピラミッドにおけるコンプレックスの概念を導入して、コンプレックス形成の有無およびその総体の相互比較の必要性を示唆したところである。

ひるがえって、東北アジアに目を転じ、朝鮮半島の三国時代高句麗において陵園が認められ、いわば王陵コンプレックスを構成していることを指摘した。そこで、高句麗における王陵コンプレックス出現の契機を求め、中国大陸の皇帝陵を調べたところ、秦・漢皇帝陵において、壮大な陵園が認められるので、いわば中国における皇帝陵コンプレックスの存在が明らかになったわけである。中国古代においては、秦・漢時代に皇帝陵コンプレックスの最盛期を見たが、そのうち後漢時代には地方豪族にまでその概念が導入されていることがわかり、その時代的背景が理解できる。

問題は、高句麗王陵コンプレックス出現の契機である。高句麗では、筆者が広開土王の陵に比定する太王陵古墳において、王陵コンプレックスのピークを見い出すが、その場合、広開土王の存在が示唆的である。高句麗では、西暦三二三年に当たる美川王一四年に、漢の武帝が設置していらしい四〇〇年以上にわたって継続した楽浪郡を倒した後、古代国家としての成長の道をたどることになる。そして、広開土王のとき、北は現在の中国・吉林省から遼寧省の一部まで、さらに、南は朝鮮の中西部まで領土を拡大して、大きな国家的発展を遂げたのである。その広開土王の脳裡

には、漢帝国の版図を東・西・南へと大きく拡大させた武帝の政治手腕が理想像として焼きついていたのであろう。そのため、自らの王陵造営に当たっても、武帝の茂陵をはじめとする、漢の皇帝陵がモデルとなったのではなからうか。この点は、ただ単に推測の域を出ないことであるが、こんごの検討課題の一つとして、関心を持ち続けたいと思っている。

[注]

- (1) Jaquetta Hawkes, *Atlas of Ancient Archaeology*, New York, 1974.
- (2) 鈴木八司、一九七九『ジャクワンピラミッド Pyramid』『世界考古学事典』上、九三二頁、平凡社。Edwards, I. E. S., *The Pyramids of Egypt*, London, 1961.
- (3) 高句麗の後期には、東明王陵と定陵寺が知られ、また、百済の後期では、最近になって陵山里の王陵群と陵寺の関係が明らかにされつつある。新羅の場合、法興王が哀公寺の北の峯に葬られたと記録されているので、やはり王陵と陵寺の関係で理解すべきである。日本では、聖德太子の磯長墓と叡福寺の関係が問題となる。これらに対し、一種のコンプレックスの概念を導入して考えたいと思っている。
- (4) 李殿福、一九八〇『集安高句麗墓研究』『考古学報』一九八〇年第二期、一六三―一六五頁、科学出版社、北京。
- (5) 池内宏、一九三八『通溝』巻上、五六―五九頁、座右宝刊行会、東京。
- (6) 藤田亮策、一九四〇『通溝附近の古墳と高句麗の墓制』池内宏博士還暦記念『東洋史論叢』五二―五二七頁、座右宝刊行会、東京。
- (7) この考え方は、すでに一九八四(昭和五九)年一〇月七日に開催された、朝鮮学会第三五回大会において、『高句麗王陵コンプレックス』と題した研究発表の中で披歴している。
- (8) 池内宏、一九三八『前掲書』五一―五六頁。
- (9) 李亨求、一九八二『高句麗の享堂制度研究』『東方学志』第三二輯、一―五七頁、ソウル。
- (10) 藤田亮策、一九四〇『前掲論文』五一―六頁。
- (11) 楊寛(尾形勇・太田有子共訳)、一九八〇『中国皇帝陵の起源と変遷』学生社、東京。

- 羅哲文(杉山市平訳)、一九八九『中国歴代の皇帝陵』、徳間書店、東京。
- 劉慶柱・李毓芳(来村多加史訳)、一九九一『前漢皇帝陵の研究』、学生社、東京。
- (12) 陕西始皇陵秦俑坑考古発掘隊・秦始皇兵馬俑博物館編、一九八三『秦始皇陵兵馬俑』、文物出版社、北京。
- 陕西始皇陵秦俑坑考古発掘隊・秦始皇兵馬俑博物館共編、一九八三『秦始皇陵兵馬俑』、平凡社、東京。
- (13) たとえば、臨潼県博物館・趙康民、一九七九『秦始皇陵北二、三、四号建築遺迹』、『文物』一九七九年第二期、一三二～一六頁、文物出版社、北京。
- (14) 秦俑考古発掘隊、一九八三『秦始皇陵二号銅車馬清理簡報』、『文物』一九八三年第七期、一一～一六頁。
- 陕西省秦俑考古隊・秦始皇兵馬俑博物館編、一九八三『秦陵二号銅車馬』、『考古与文物叢刊』第一号、『考古与文物』編輯部出版、西安。
- (15) 秦俑考古隊、一九八〇『臨潼上焦村秦墓清理簡報』、『考古与文物』一九八〇年第二期、四二～四五頁、西安。
- 秦俑坑考古隊、一九八二『秦始皇陵園陪葬坑鉛探清理簡報』、『考古与文物』一九八二年第一期、二五～二七頁。
- (16) 始皇陵秦俑坑考古発掘隊、一九八二『秦始皇陵西側趙背戸村秦刑徒墓』、『文物』一九八二年第三期、一一～一四頁。
- 秦俑坑考古隊、一九八〇『秦始皇陵東側馬廐坑鉛探清理簡報』、『考古与文物』一九八〇年第四期、三二～四一頁。
- (17) 臨潼県博物館・趙康民、一九八三『秦始皇陵東側發現五座馬廐坑』、『考古与文物』一九八三年第五期、二二～二六頁。
- 程学貴、一九八五『始皇陵東側又發現馬廐坑』、『考古与文物』一九八五年第二期、一一〇～一一一頁。
- (18) 陕西省考古研究所漢陵考古隊、一九九二『中国漢陽陵彩俑』、一四～一七頁、陝西旅遊出版社、西安。
- (19) 村元健一・来村多加史、一九九五『前漢陽陵陪葬坑発掘の成果』、『古代文化』第四七卷第七号、三二～三七頁、京都。
- (20) 劉慶柱・李毓芳(来村多加史訳)、一九九一『前掲書』、九二～九九頁。
- (21) 楊寛(尾形勇・太田有子共訳)、一九八〇『前掲書』、三三頁。
- (22) 陕西省文物管理委員会、一九六四『陝西興平県茂陵勘査』、『考古』一九六四年第二期、八六～八九頁、考古雜誌社、北京。
- 茂陵文物保管所王志杰・陕西省博物館朱捷元、一九七六『漢茂陵及其陪葬冢附近新發現的重要文物』、『文物』一九七六年第七期、五一～五五頁。
- (23) 劉慶柱・李毓芳(来村多加史訳)、一九九一『前掲書』、一三五～一六九頁。
- (24) 中国社会科学院考古研究所、一九九三『漢杜陵園遺址』、『中国田野考古報告集』考古学專刊丁種第四一號、科学出版社、北京。
- (25) 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏城隊、一九九三『漢魏洛陽城西東漢墓園遺址』、『考古学報』一九九三年第三期、三五一～三八〇頁、北京。